Neighborhood-Community Relation in Rural Society
by John H Kolb and Douglas G Marshall ; Reseach Bulletin 154, 1944.

書　評　　徐

これはウイスコンシン大学 Kolb 教授による Dane 郡の一九四一年の調査の報告である。六十頁ほどの小冊子の内容は、調査結果の説明と Methodology に関するページが主要部分を占め、それに Neighborhood (N) - Community (C) の関係に関する理論的又実際的な Kolb 教授の Implication、用語の簡単な説明をしたGlossary及び若干の統計表である。以下に調査の内容とその方法について簡単に紹介しておきたい。

ウイスコンシンの中部部にある Dane 郡の調査は一九二一年以来十年毎に大規模に実施され、その変化の傾向をみることが主要な問題点とされた。一九四一年の調査では

まずNの数と性格と機能が取上げられ、二年以来のchangeとperiodに関する傾向が追求され、さらにNとより大きな地域社会との関聯性に重点が移された。まず、Nが教育・宗教・社会（社交）・経済・コミュニケーションという五つの主要な機能の分野のうち二つ以上でなんらかの機能が営まれているか否かでactive or inactiveに分類され、Nの性格及びNと他の集団との機能的な結合の面から分析が進められている。結論的には第一に、Nの数・active-inactiveの分類・五つの分野間の相対的な重要性・に関し多少の変化は見られたが、二〇年間顕著な相異があるとはいえないことから、Nのstabilityの高さが指摘されている。しかし、第二に、外的な面で、familyもNもそれ自身では孤立自存できず、「我々がbuddyと呼ぶcomplex social fabricにおいて他の集団と相互関係」のなかでのみ存在しうるようになったことが強調されている。詳しい記述は省略するが、最後に、二〇年間の最も顕著な傾向はfarmer, hamletの居住者、villager、小都市民cityの居住者の相互依存関係が強化し、直接的なpersonalな接触さえ彼等の共通のneedから形成されたgroup relationship が生れて来たことであり、「彼等のactivityは彼等のgoalによって導かれる」ことがいよ〳〵顕著になったと結論されている。

本書で興味があるのは、むしろNetwork analysisのノートの部面である。まず、Nの存在・場所・各Serviceのためにfamilieが出かけるactive・の決定のため州の全家族へsurvey schedulesを通して簡単な調査票（Form 10）が送られた（回収率四九%！）。そのdataからNとCのareaや相互の結合に関する地図が仮設的に作られ、それを基にして、サンプルのNへ九五のうち二五）、サンプルのCへ一三のうち六）につきfield surveyや綿密なinterviewingが組織的な面接、high schoolの学生のグループ討論や態度調査によって重ねられ仮説が検討された。NやCの選択はN-N、N-C、N-school、C-schoolの関係をみるのに好都合なように意図的に行われ、変化の有無、open countryかhamletか、位置、cityへの距離などの基準から層化し、それによる有意選択も第二次的には考慮された。以上については何等目新しい所はない。統計的な処理が比較的考慮された点はNのactivenessの測定に関してである。Nはまず五つの分野でactive-reactive に分類されたが、family-bond（サンプルactive N 8%/12 Ph.d. Kids, サンプルreactive N 8%/12 Ph.d. Kids）全数？選択方法？）でactiveかinactiveか区別されるために一五の要因についてχ^2検定が行われ、有意義な要因――職業・Tenure・Nationality・訪問・居住の長さ・Headの年令・労働の交換――が取出された。各々の間の定性相関係数が計算され、比較的独立はTenure・Nationality・religious・居住年数の要因がactivenessの測定に使用された。Tenureの比率、居住のlimited period、同一のNationality back groundの比率がある限度まで来るとactive-inactive間に移動がみられる点Toleration Pointが要因毎に計算された。ついで、各Nを通しての平均%（Ⅲ）（各要因毎）とその%の標準誤差EP（厳密なサンプルを仮定か？）から九五%の水準でのレンシ（Ⅲ±1.96×EP）がactiveとinactiveについて計算され、%の重複する部分Neutralを別にし、三つのgradeの比率%が決定された。次にNのactivenessによるRankingの方法が検討されている。1）Toleration point Method active（3段）、Neutral（2段）、inactive（1段）を要因毎に各Nについて計算。2）各要因に実際の各Nの%を合計し、平均（1/3）する方法。3）S.D Methode――いわゆる規準化された偏差（$\frac{p-\bar{p}}{S.D}$）を要因毎に各Nに計算――正規分布を仮定。4）Nの各機能のactive factorの数の単純集計による方法。5）Kendall Rankingによる主観的な方法。さらにこの五方法による各Nの夫々のRankingの相関係数を計算している。一九四四年実際にNを観察した結果以上の方法による予測の正しさが証明されたといわれる。なお、active Nの Rank

と center (city) への距離との関係や trade area の center と trade center との関係についても簡単なグラフによる correlation の検討、相関係数の計算及び検定が行われているが省略する。以上、紙数の制限から極めて雑な紹介になったが、最後に気の付いたことを二、三附け加えて終りたい。

Kolb らの十年目に行われる長期にわたった同一地点の調査、しかも狭いNの内部構造の分析に終始しない広範な地域社会との機能的な結合の追求、時間、空間共にスケールの大きさは我々に反省を促す点が多い。しかも、ある程度の統計的処理の仕方にも考慮が払われている。しかし同時に Kolb の methodology には疑問も生れる。data の統計的処理について、サンプリングの確率論的根拠を無視した素雑さや Premitive な点（勝手なサンプル・全数調査・曖昧な回収の資料に対する検定？）は余り追求すべきではないであろうが、十年目毎のかかる調査によるNやしの変化の追求という点が一体何を意図しているのであろう。単なる記述的な表面上の比較の外にもっと根本的な検討さるべき問題があるような気がする。かかる問題を無視した調査なら、ただの官庁調査でも似たようなことはなしうるのである。rural society を変化せしめているものは何か、その変化がどのような歴史的社会的意味をもっているのか、こういう点については余り教えては呉れない。私の読み方の浅さなのか、或は米国の農村社会学に、そのおかれている現実的な立場や政策的な社会的要請から、それを注文する方が無理なのであろうか。Kolb の統計的処理に対して、いささかの科学的方法が導入されたとしてもそれが農村社会学の存在価値を決定する何ものでもないことはあらためて云うまでもない事柄ではないだろうか。